２０２０年５月２日　毎日新聞朝刊

内戦と和平

東大作著（中公新書・９６８円）

世界的な感染症流行で、平穏な日常や自由が奪われる怖さを私たちは痛感した。究極の非日常であり、「不治の病」とされる戦争について、今こそ考えてみたい。本書によると、冷戦終結以降、国家間の戦争が減る一方、近年増加しているのが内戦で、とりわけ顕著なのが周辺国や大国が関与する「国際化した内戦」だ。

イラク、シリア、アフガニスタン、南スーダンを事例に、著者は内戦解決のための和平交渉の可能性を粘り強く探っていく。その重要なかぎと考えるのが、交渉を効果的に進める上で「だれをどう巻き込んでいくのか」という「包摂性」だ。

著者はＮＨＫディレクター、国連勤務を経て研究者に転身。一貫して平和構築をテーマとする。メディア経験をいかした徹底したインタビューによる現場へのこだわり、国連で体得したグローバルな視点での理想の追求と着地点の模索が、研究者としての提言に説得力を加えている。

和平による内戦解決は容易でなく、国連も調停者として十分に機能しない中、「平和国家」日本の役割にも言及。「世界の対話促進者」となる可能性に触れ、長期的には日本の安全保障につながると訴える。（健）